

一心寺の仁王門

写真は日本経済新聞 1 月 21 日夕刊「探建 再発見」。1 月 6 日にレポートしたように、天王寺の茶臼山から安居神社を散策したとき、一心寺の奇抜な山門が見えてきた。歩き疲れていたので通り過ぎたが、この山門について知りたかった。この記事を読み、山門「仁王門」の成り立ちがわかった。

「お骨仏」で知られる浄土宗一心寺（大阪市天王寺区）の山門「仁王門」は、モダンなたたずまいが目目を引く。建築家としても活躍した同寺の第 59 代住職で、現長老の高口恭行氏（78）が設計した。

仁王門は高さ 14 ㍎、幅 40 ㍎。両脇の仁王像は彫刻家の神戸峰男氏、門扉に刻まれた天女像は画家の秋野不矩氏の手による。鉄骨に強化ガラスの屋根を乗せ、インドの宇宙観とされる「逆さまに生い茂る樹木」や天空がベールに覆われた極楽浄土をイメージした。

寺にはかつては大坂城から移築された「黒門」と呼ばれる門があった。しかし門を含む寺の大半が 1945 年の空襲で焼失。仁王門は復興の集大成として 97 年に完成した。

同寺は宗派を問わず納骨を受け付けており、10 年に 1 度のお骨仏開眼法要には 1 日数万人もの人が訪れる。門の基礎部分は一息つく休憩所。その上は野外舞台になっており、法要時は天女の舞楽が披露される。高口氏は「寺は古来の様式にとらわれがちだが、境内を多数の人に開かれた空間にするための機能を考え今の姿になった」と話す。

目指したのは「広場の寺」。高口氏は 70 年の大阪万博で「お祭り広場」の設計などに関わった経験を持つ。仁王門は広場に架かっていた大屋根の面影も残している。

仁王門だけでなく、一心寺と「お骨仏」の由来についても知りたくなった。

(2019 年 1 月 27 日)

